

平和紙芝居に関する基礎的な研究『二度と』を事例として

正 司 顯 好・浅 井 拓久也

A Preliminary Survey on peace Kamishibai “Nidoto”

SHOSU Akiyoshi, ASAI Takuya

キーワード：平和紙芝居、松井エイコの世界、
共感

1 はじめに

2018年2月7日紙芝居文化の会は、一般社団法人日本記念日協会から毎年「12月7日」を「世界 KAMISHIBAI の日」として正式登録することを認められ「記念登録証」を受理した。

それを受けて紙芝居文化の会は2018年12月7日に向けて次のメッセージを世界に発信した。「12月7日は「世界 KAMISHIBAI の日」です。この日、私たちは、紙芝居を通して平和を希求します。紙芝居を愛する人たちと一緒に、日本中、世界中で紙芝居を演じ、楽しみましょう。そして、共に生きるための共感の世界を広げていきましょう。」¹⁾

その紙芝居文化の会で中心的な役割を果たしているのが松井エイコです。そんな彼女を2018年9月22日、本学で開催された紙芝居講座の講師として招いた。これまで「紙芝居文化の会創立に携わり、紙芝居の創作と普及にも力を注いできた。平和紙芝居『二度と』（童心社）は、2006年「ドイツ・ミュンヘン国際青少年図書館」が企画する、平和を伝えるための国際図書展に選ばれ、世界をめぐる。フランス、ベトナム、ドイツ、中国、日本各地にて講演。紙芝居文化の会、国内統括委員。」（松井自身のプロフィールより）という経歴の紙芝居作家である。そんな松井エイコの代表作『二度と』を取り上げ、平和について考える。

2 調査の概要

(1) 調査目的

紙芝居作家松井エイコが、どんな思いで平和紙芝居『二度と』を創作したのか本人へのインタビューから考察する。さらにこの作品を演じる演者としての立場からと紙芝居を見る観客としての立場からも考察し、平和について紙芝居が果たす役割について考えることを目的とする。

(2) 調査対象

平和紙芝居『二度と』脚本、絵 松井エイコ
童心社（12場面）

(3) 調査方法

本学で開催された紙芝居講座に講師として松井エイコを招き終了後、会議室1でインタビューによる聞き取り調査を実施した。

(4) 調査時期

2018年9月22日（土）午後4時00分～午後6時00分に実施した。

3 調査の結果

(インタビュー内容)

〈日時〉2018年9月22日（土）

午後4時00分～午後6時00分

〈場所〉埼玉東萌短期大学、会議室1

〈テーマ〉紙芝居作家として生きて思うこと
(平和について)

〈聞き手〉正司顯好（執筆者）

(聞き手) 今日は紙芝居講座の講師として午前10時00分から貴重なお時間をいただきありがとうございました。引き続きインタビューの方もよろしくお願ひ致します。

(松 井) 講座に参加された44名のみなさんが、とても熱心に受講して下さい大変やりがいがありました。

(聞き手) 松井さんは美術大学を卒業されてから、まず壁画家としてお仕事を手掛けられましたか、紙芝居はいつ頃から描き始められたのですか。

(松 井) 紙芝居の創作を始めたのは、1999年頃からです。

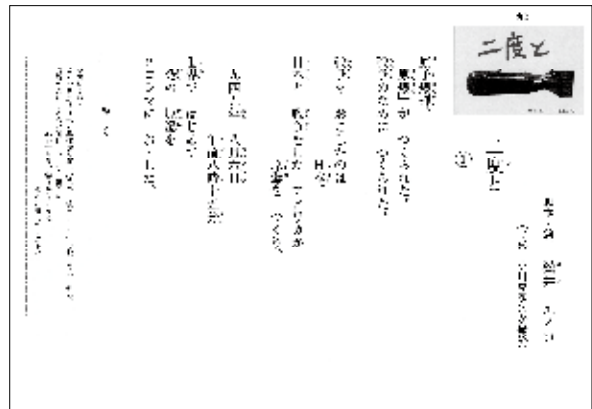
(聞き手) きっかけは何だったのでしょうか。

(松 井) 1998年沖縄市「くすぬち平和文化館」に世界初の紙芝居劇場が誕生したのです。私はこの建物に壁画を創りました。そして1999年3月、この紙芝居劇場にて第1回の出前紙芝居大学が開かれ、私はそこで紙芝居の素晴らしさに出会い、創りたいと思いました。

(聞き手) 代表作に平和紙芝居『二度と』がありますが、なぜこの紙芝居をつくられたのでしょうか。

(松 井) 私は戦争を体験したことはありません。けれども、私の母と父が子どもの頃は戦争でした。私の祖父は日本が起こした侵略戦争の時、経済学者として「この戦争は間違っている」と説いたため、牢獄に入れられ、若くして死にました。そして私の母は「どんなことがあっても戦争をしてはいけません、平和を守りぬくのです。」と語り続けました。だから私は、自分の生き方と作品を通して平和を築きたいと願ひ、生きています。紙芝居のつくり出す「共感の喜び」は平和への道。私は子どもたちに平和を手渡す紙芝居を、どうしても創りたいと思ったのです。そして長崎の紙芝居研究会の人たちが、創る歩みを共にしてくれました。

【第1場面】



(聞き手) この作品には松井さんの平和に対する大変な思いが込められているのが、実演を通して観客側にもひしひしと伝わってくるのですが、1場面ごとにお聞きしていきたいと思ひます。まず第1場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 紙芝居は第一場面から、作品の世界がまっすぐに観客の心に向かって出ていきます。だから私は『二度と』という言葉だけを単に題名として書いたのではなく、原爆を二度と落とさせないことこそ、人類が未来のためにしなければならないという思いを、文字に刻むように描きました。そして人間がつくり出した最大の罪悪、原子爆弾の直視から始めたいと、原子爆弾の写真を提示したのです。

(聞き手) 第1場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 「戦争をおこしたのは 日本」という言葉です。子どもたちに真実を伝えたいと書きました。世界中の人たちと手をつなぎ平和を築くに

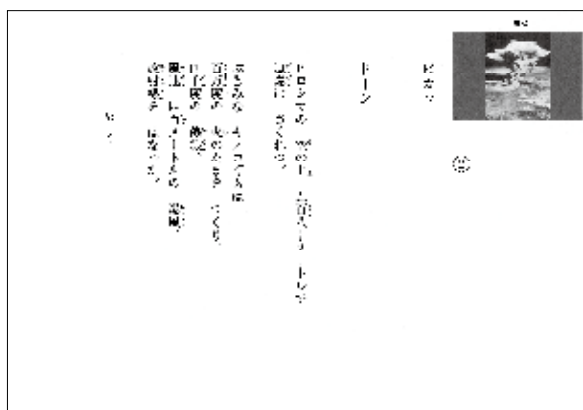
は、この言葉が重要です。

第1場面〈演者としての視点から（考察）〉

・まず最初に「二度と」という題名を演者が発声するとき、単純に文字を読み流してはいけない。語らなければならない。松井が述べるように「原爆を二度と落とさないことこそ、人類が未来のためにしなければならないという思いを」込めて語りかけなければならない。画面も「人間がつくりだした最大の罪悪、原子爆弾の直視から始めたいと、原子爆弾の写真を提示した」とあるように演者は画面をしっかり覗き込み、間をおくことの効果を演出できるとよい。「戦争のためにつくられた」（脚本）原子爆弾を観客と再認識し共有できる間をしっかり演出する工夫が必要だ。

さらに「戦争をおこしたのは 日本」という脚本の裏には1941年12月8日、日本軍はハワイの真珠湾を攻撃したという事実がある。宣戦布告なしの開戦だった。この事実をこの紙芝居を観て初めて知ったという学生（アンケート調査対象学生）は8割以上であった。歴史的事実を踏まえた上で演じることが望ましい。

【第2場面】



（聞き手）第2場面の絵について大切にされたことは何ですか。

（松井）原爆が炸裂し、人類の悲劇が引き起こされた瞬間を、観客が写真で見るとき、過去の出来事として捉えず、自分の内面を通して捉えてほしいと思いました。そのために写真の左右に濃灰色をもってきました。濃灰色によって、見る人が自分の内面を感じ、その内面を通して、この場面を自分のものにしてほしかったのです。

（聞き手）第2場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

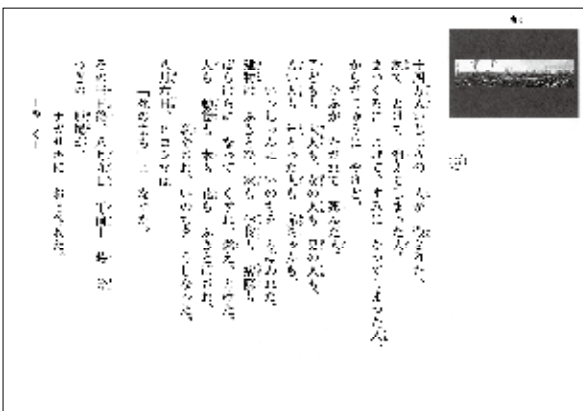
（松井）深い悲しみと怒りをこめ、だからこそ、最も簡潔に、原子爆弾の炸裂した瞬間を書きました。

第2場面〈演者としての視点から（考察）〉

・ヒロシマに原爆が投下。「原爆が炸裂し、人類の悲劇が引き起こされた瞬間を」（松井）写真で見せる場面である。「ピカッ ドーン」（脚本）をどう演じるかは演者によってさまざまであろう。

大事なことは次の第3場面の町全体を焼き尽くした後の「ヒロシマは「死のまち」となった。」(脚本)につながる演じ方が要求される。松井は観客が原爆を「過去の出来事として捉えず、自分の内面を通して捉えてほしい」それ故に「写真の左右に濃灰色を持ってきました。」そのことで「見る人が自分の内面を感じ、その内面を通して、この場面を自分のものにしてほしかった。」と述べている。これは松井自身が戦争を体験していないにもかかわらず、いまだ戦争は終わっていない。戦争の傷跡は消えていないということを松井自身が実感していることであり、戦争は今もなお地続きで松井までつながっているのである。その思いを松井だけでなくこの紙芝居を通じて見てくれる一人ひとりと共感し、平和の大切さを伝えたいと念じているのであろう。

【第3場面】



(聞き手) 第3場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 「死のまち」となった広島を、私は絵に

描くのではなく、写真で直視したいと思いました。次々と写真を見ていく中で、私のはり裂ける思いが凝縮された一枚の写真がありました。この写真の奥底から人々の叫びが聞こえてくるのです。そして写真を横長に入れ、画面を抜いていく時、横長であることによって、この写真の奥底にあるものがより、観客の心に向かって出ていき広がるようにしました。

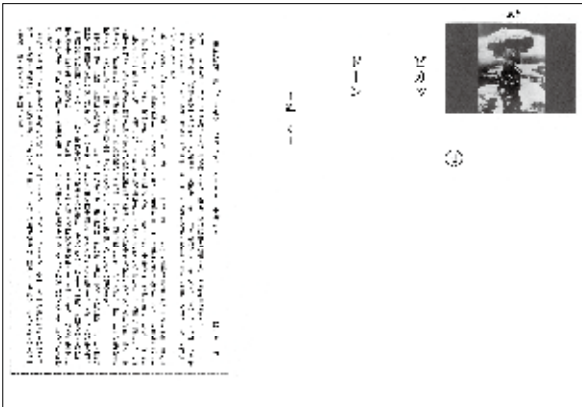
(聞き手) 第3場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 写真の奥底にある人々の叫びを、刻むように書きました。

第3場面<演者としての視点からの考察>

・ヒロシマに原爆が投下された第1場面から第3場面下まで連動し、一気に観客を作品世界へ引き込んでいく内容になっている。この場面では「死のまち」となったヒロシマの惨状が具体的に脚本化されているが、演者としては句点をあまり意識せず文章の意味をひとまとめにして読むような演じ方をした方が、観客により的確に伝わりやすくなる。松井が多くの写真の中からこの1枚の横長の写真を選んだ理由を演者は受け止めながら、この画面を静かに抜くことが望ましい。

【第4場面】



(聞き手) 第4場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 絶対に落としてはならぬ原爆が、広島
の3日後、さらに長崎に落とされたのです。写真
の左右の濃灰色は、第2場面の広島に落とされた
瞬間の場面とは、少し違う灰色としました。見る
人がさらに自分の内面を感じてほしいからです。

(聞き手) 第4場面の脚本について大切にされた
ことは何ですか。

(松 井) 私は「ピカッ ドーン」としか、この場
面に書けませんでした。無限の怒りをこめて。

第4場面<演者としての視点からの考察>

・ヒロシマに原爆が投下された3日後、さらにも
う一発の原爆が長崎に投下された。ここでも写真
を採用し、松井は「写真の左右の濃灰色は」「少
し違う灰色としました。」「見る人がさらに自分
の内面を感じてほしいから」と述べている。灰色
は、前場面よりさらに濃い色になっている。二度
目の「ピカッ ドーン」であるが、松井は「ピカ

ッ ドーン」としか、この場面に書けませんでした。
無限の怒りを込めて。」と述べている。演者
は実際の原爆投下時の瞬間を最大限のイメージを
膨らませながら「ピカッ」という強烈な光の強
さ、「ドーン」という炸裂音と爆風の広がってい
く時間的長さを計算しながら、街全体を飲み込み
焼き尽くし破壊してしまう不気味さを演出するよ
うな演じ方が望ましい。

【第5場面】



(聞き手) 第5場面の絵について大切にされたこ
とは何ですか。

(松 井) この場面は今までのように濃灰色を配
さず、画面いっぱいの写真としました。いっばい
に広がった写真によって、観客は臨場感を持ちま
す。

(聞き手) 第5場面の脚本について大切にされた
ことは何ですか。

(松 井) 「長崎のまちが消えた」という言葉を、
臨場感の中で捉えてほしいと書きました。

第5場面〈演者としての視点からの考察〉

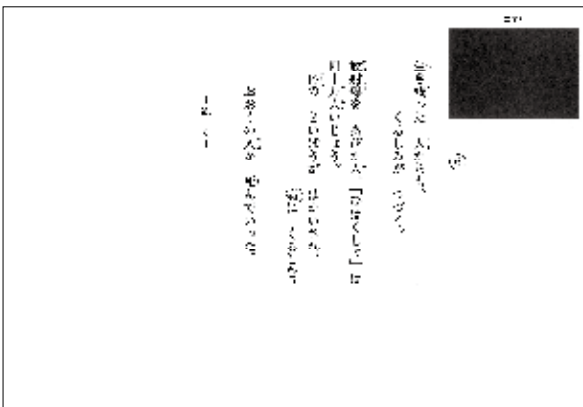
・松井は「長崎の町は消えた」という言葉を、臨場感の中でとらえてほしい」という思いもあって「今までのように濃灰色を配さず、画面いっぱいの写真としました。」と述べている。ここには物事を作り上げるには膨大な時間と労力を必要とするが、壊す、壊れる時は一瞬であるという哲学的な意味にも通じている。それを至近距離からのクローズアップした写真で観客に見せるという松井の手腕は見事である。演者は、そのことを理解し咀嚼しながら演じることが望ましい。

ながら、はり裂ける思いで書きました。その深い悲しみを刻みました。

第6場面〈演者としての視点からの考察〉

・一般的な紙芝居では全く見ることでできない黒一色の場面である。ヒロシマで命を奪われた人々14万人以上、ナガサキで命を奪われた人々7万人以上、さらに被爆者は40万人以上で苦しみは続く。演者は、そんな人々の苦しみを「暗黒」の中に込めなければならなかった松井の思いを受け止めながら演じることが望ましい。

【第6場面】



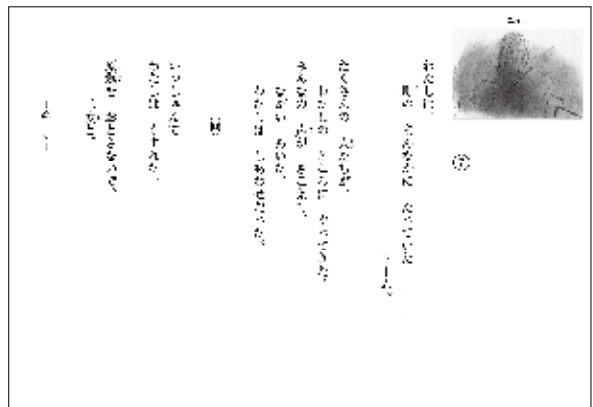
(聞き手) 第6場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 原爆が落とされたあの日の苦しみを、どのように表せばよいのか、私はただ「暗黒」の中にこめるしか、ありませんでした。

(聞き手) 第6場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 1場面から6場面までの脚本は、泣き

【第7場面】



(聞き手) 第7場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 暗黒の場面までを見据え、未来への希望の扉を開きたいと、そんな渴望から生まれたドームの姿です。

(聞き手) 第7場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

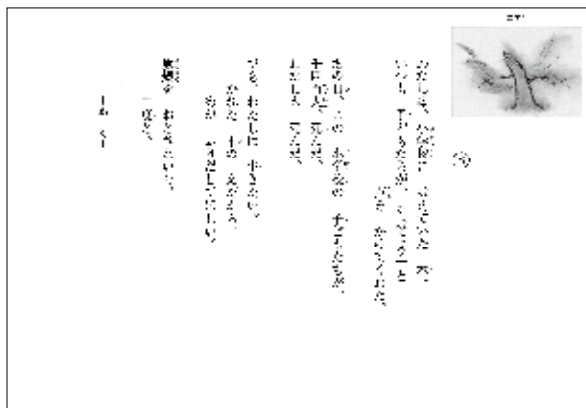
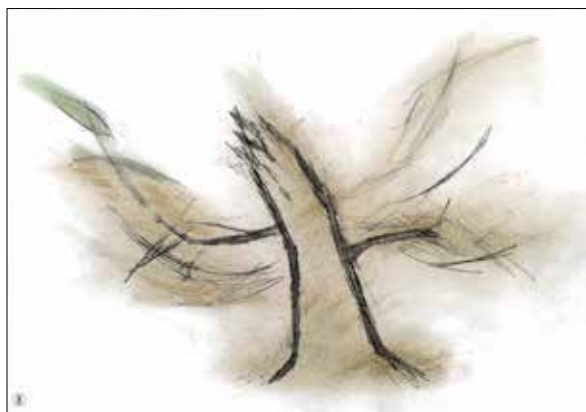
(松 井) 崩れたドームが叫ぶ「原爆を落とさな

いで二度と」。その時、未来への扉がかすかに開きます。この「二度と」の叫びは未来へ向かうコミュニケーションをひきおこし、未来へ向かう共感のともしびを、心の中にともします。

第7場面<演者としての視点からの考察>

・第1場面から第6場面までの前半部分は、ヒロシマ、ナガサキに原爆が投下された事実を直視しながら史実に基づく脚本であったが、第7場面からは「暗黒の場面を見据え、未来への希望の扉を開きたい」と松井が述べているように、手法も松井自身の筆によるパステル画に変化していく。この場面で初めて「原爆を おとさないで二度と。」(脚本)という言葉が登場する。これは題名の「二度と」と呼応する関係にあり、この紙芝居全体を通じてのキーワードになっている。演者は、この言葉が紙芝居を見てくれる観客の一人ひとりの身体にあたって心に響くように工夫しながら心を込めて演じることが望ましい。

【第8場面】



(聞き手) 第8場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松井) この木の姿を描くのは、とても難しかったです。「わたしも 死んだ」と言う木が「わたしは 生きたい」と叫ぶ。それが描けずに、何枚もの絵を捨てました。そして描いては消し、消しては描いてと、描きあげたのが、このパステルの絵。一枚の葉の中に象徴的に、芽吹きの大切さを込めていきました。

(聞き手) 第8場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松井) 「わたしは 生きたい」。この言葉こそ、希望が芽吹く最初の言葉として、書きました。

第8場面<演者としての視点からの考察>

・擬人化された前場面の原爆ドームに続いて、一本の木が登場する。木は原爆によって「死んだ」と言いながら「生きたい」と叫ぶ。それを表現するために作家、松井の苦悩が垣間見られる場面である。そして二度目の「原爆を おとさないで二度と。」(脚本)の言葉が登場する。演者は松井の思いが観客に届き、さらに深まるように観客一人ひとりの目の中に飛び込むような演技方をすることが望ましい。

【第9場面】



(聞き手) 第9場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 私は長崎で奥村アヤ子さんに会いました。アヤ子さんはこの場面の脚本通りのことを語ってくれました。殺された人々、苦しみぬいた人々の無念の悲しみと怒りを、どのように表せば良いのか。私は何枚も何枚も絵を描き続けました。アヤ子さんが暗黒から立ち上がり、全身から出る「生きる」という叫び。それを私は「空に向かって両手をあげる、8歳のアヤ子の姿」に凝縮しました。

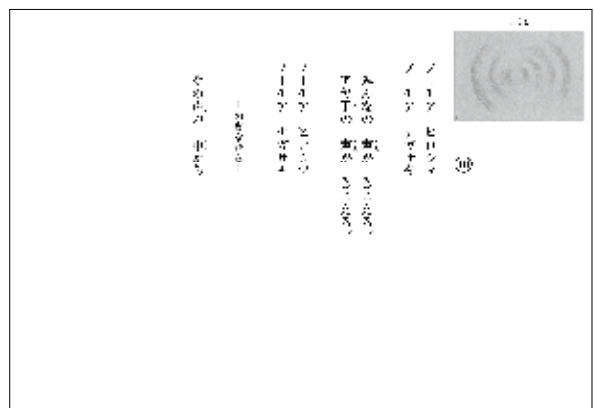
(聞き手) 第9場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 「私は生きる」という叫びは、あの暗黒の中にいた全ての人々の叫びです。そのすべての人々の叫びを書きたいと願いました。その叫びが「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」となっていき、「二度と」の言葉に共鳴します。この共鳴が未来をつくりだすコミュニケーションとなっていて、共感を高めていきます。

第9場面〈演者としての視点からの考察〉

・実際にナガサキで被爆した当時8歳の奥村アヤ子さんが登場する。松井はアヤ子さんから取材した通りの言葉を脚本化したという。アヤ子さん一人が生き残り、「暗黒から立ち上がり、全身から出る「生きる」という叫び。」それを松井は「空に向かって両手をあげる、8歳のアヤ子の姿」に凝縮しました。」と述べている。この場面の特徴は「死んだ」「死んでいる」という「死」の言葉が5か所で使われている。原爆によって一瞬にして奪い取られた命の数々である。その後に「あの暗黒の中にいた全ての人々の叫び」がアヤ子の「私は生きる。生きる。」のセリフに凝縮されていく。そして三度目の「二度と 原爆を おとさないで。」の言葉が登場し、さらに「ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ」の言葉につながっていく。この脚本の流れは計算を超えた完成度の高さになっている。演者はここでも句点にとらわれ過ぎないで脚本の意味が観客に伝わりやすいように一気に演じていくのが望ましい。

【第10場面】



(聞き手) 第10場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松井) 「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」の声が紙芝居の特性と一体化して、出ていき、広がっていくように描いていきました。

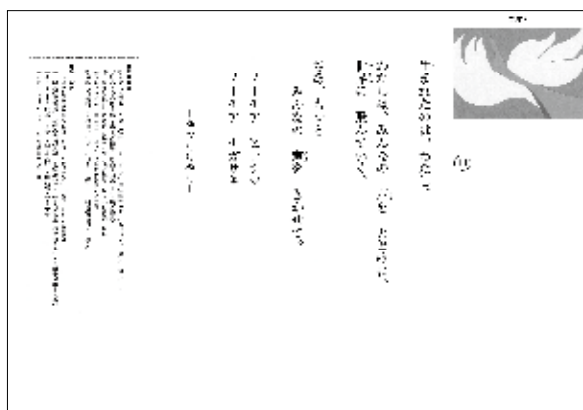
(聞き手) 第10場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松井) 「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」の声が、観客の中に未来への輪を広げようと。

第10場面<演者としての視点からの考察>

・この場面の絵だけを観客が観ても何を意味しているか分からないであろう。しかしこの前後の場面の絵から考えると、この不思議な絵が果たす役割は大きい。まさに松井は舞台から作品世界が出ていき広がる紙芝居の特性を最大限に活用しながら、演者に「ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ」のセリフを繰り返し演じるように演出したのである。演者は「その声が、観客の中に未来の輪を広げようと。」(松井) 演じることが望ましい。

【第11場面】



(聞き手) 第11場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松井) ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキの声をいできて、私は自分の全人生から湧きあがるように「羽ばたく鳥」を描かずにはいられませんでした。渾身の思いで描いた鳥は、希望に向かって飛び立ちました。

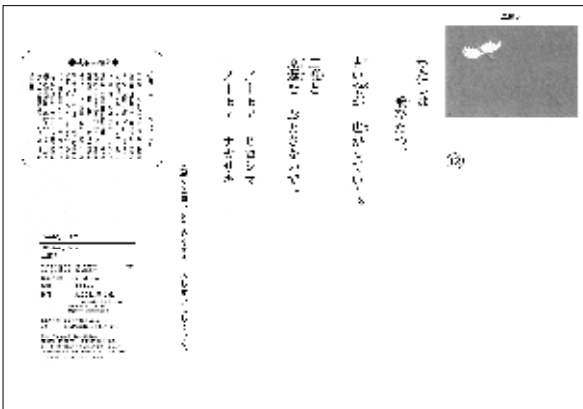
(聞き手) 第11場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松井) 私自身が生きる希望に向かって羽ばたきたいという、思いをこめました。

第11場面<演者としての視点からの考察>

・この場面で松井が「渾身の思いで描いた鳥」が登場する。ここで観客は「羽ばたく鳥」の絵に出合うことで感動を手渡される思いになる。演者は、その感動を損なわないような演じ方をするのが望ましい。四回目に登場する「ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ」に思いを込めながら。

【第12場面】



(聞き手) 第12場面の絵について大切にされたことは何ですか。

(松 井) 青い空の色です。この青には、生きたかった人々の悲しみがあり、そして「平和をつくらうとする人々がめざす理想」がこめられています。百色以上の青い色の紙の中から、この青を選びました。

(聞き手) 第12場面の脚本について大切にされたことは何ですか。

(松 井) この紙芝居のラストには、従来のほとんどの紙芝居に付いているセリフとしての「おわり」の言葉がありません。それは観客の心の中で鳥が飛び続け、生きることの輝きで空が広がり続けてほしいという、私の願いからなのです。

第12場面<演者としての視点からの考察>

11場面で登場した貼り絵による鳥が、青い空のかなたに飛んでいく場面である。そして最後に「二度と 原爆を おとさないで。ノーモア ヒロシマ ノーモア ナガサキ」のセリフでこの紙

芝居は締めくくられている。演者は見終わった観客一人ひとりが平和について考える余韻を残しながらゆっくり静かに舞台を閉じることが望ましい。

(聞き手) 一場面ごとに丁寧にお話しいただき、ありがとうございました。全体の絵の構成が写真から始まり、絵に移行し、最後には貼り絵で締めくくられていますが、なぜそのようにされたのでしょうか。

(松 井) 1場面から6場面は、原爆を直視することを写真でしか表せないと思い、7場面から10場面は、希望の扉を開き、心の世界を広げていきたいと、パステルを使いたくなりました。そして凜として羽ばたく鳥は、貼り絵でゆるぎない形を創りたかったのです。新しい手法の紙芝居だと言われますが、新しさをねらって創ったのではなく、どうしてもこのような表現でしか表せないことから、生まれた構成です。

(聞き手) 完成された紙芝居『二度と』は海外をはじめ、様々なところで演じられてきましたが、どのような観客の反応があり、それに対してどのような感想をおもちですか。

(松 井) 今、『二度と』は世界の国々で自国の言葉に翻訳され、演じられています。ベトナムの村で、フランスやスペインの図書館で、アメリカの学校、トルコの町で、メキシコの集会で。家庭や保育園などでも。私自身は、紙芝居講座や学校、保育園など、2歳から5歳の子どもたちにも演じてきました。子どもたちは、まっすぐな眼で、「戦争がひきおこしたこと」を見つめます。鳥が青い空に飛び立つ場面で、みなの方を向くと、そこにあるのは凜とした子どもの姿、平和をつくりたいと願う一人ひとりの顔。「本当の仲間がここにいる」と、全身に深い喜びが満ちていきます。上海のインターナショナルスクールで、11歳の子どもたち百人に演じた時のこと、生まれた国の違う子どもたちが、紙芝居の共感の中で「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」を心深く響かせ、「平和をめざす理想」を共にした時間を、私

は心に刻み続けています。

(聞き手)最後に紙芝居『二度と』を通じて平和に対する思いを聞かせていただけますか。

(松 井)共感を生み出す紙芝居は、素晴らしい力を持っています。そして平和紙芝居の内容は、「戦争とは何かの本質を捉え、戦争とまっすぐに向き合う中で、それを乗り越えて生きる希望、めざすことを描く」ことが必要ではないかと考えています。それは子どもたちに「人間らしく生きる」ことの意味を手渡すことになる。『二度と』を演じると、そこにいる子どもが、この紙芝居をほしいと言ってくれます。私はみんなが『二度と』を演じてほしい、戦争を体験したことのない私たちが、今こそ、紙芝居で平和をつないでいきたいと、願います。

(聞き手)今後も紙芝居『二度と』を超えるような紙芝居の創作を期待いたします。今日は貴重なご意見ありがとうございました。

4 まとめ

(1) 『二度と』に対する観客の3つの意見

『二度と』に対する観客（養成校学生や保育者等）の意見を整理すると、以下の3つのことがわかった。^(注1)

まず、構成がシンプルゆえに作品の内容が伝わりやすいということである。本作品は、戦争の悲惨さを観客に訴えかけるものであるが、史実を踏まえて極めてシンプルに構成されている。作品中には、単に白黒だけで表現されている場面もある。実際の声にも、「絵が白黒で言葉もストレートで胸に刺さる」、「絵が白黒であるところにも戦争の影を感じた」とあるように、単純な白黒であることが、観客の想像力を刺激して、内容がいっそう伝わっていることがわかる。このように、本作品は構成がシンプルゆえに、作品が伝えたいメッセージが観客に伝わりやすいものと思われる。

次に、写真が効果的に使われていることである。『二度と』には、イラストだけではなく、複数の写真が用いられているが、実際の写真であるがゆ

えに、観客の心にいっそう訴えかけることができている。実際の声にも、「本物の写真があることからよく原爆について伝わってきました」、「本物の写真を使ってそれがとてもリアルに感じられました」、「実際の写真を入れることで戦争の悲惨さがより伝わってきた」とある。このように、作品中の写真が、観客に強い印象を与え、作品が伝えたいメッセージを効果的に伝えられていることがわかる。

最後に、本作品は観客層を選ぶということである。本作品は言葉や構成はシンプルであるが、それで本作品の内容そのものを考えると一定の年齢にならないと難しいという意見があった。たとえば、「年長には難しい言葉があり、難しいかなと思った」のように、年長になっても本作品の理解は難しいという意見が多くあった。また、「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」の英語部分に関しても、保育所や幼稚園の子どもには難しいのではないかという意見があった。

(2) 本作品を子どもたちに届けるために

本作品は園児には難しいという見解について検討したい。確かに、子どもの言葉の発達状態や物語を読んだり聞いたりしたこれまでの経験の蓄積によっては、本作品の脚本を理解することは難しいであろう。「ノーモア」という英語が子どもに理解できるかという保育者の声もあった。子どもの言葉の習得を促す保育を日々行う保育者としては、妥当な指摘であろう。

しかし、こうした指摘は、子どもも大人と同じように理解すべきであるという前提に基づいている。言葉を聞いて、内容を理解して、全体で伝えたいメッセージを理解して、というようにである。しかし、子どもには子どもなりの理解の仕方や過程がある。『保育所保育指針』でも、子どもの月齢によって物語の理解の仕方を次のように区別している。²⁾

「保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。」(乳児：身近なものに関わり感性が育つ)

「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。」(1歳以上3歳未満児：言葉)

「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」(3歳以上児：言葉)

ここからわかることは、本作品を使い分けていく必要性である。別の言い方をすると、いきなり脚本全体を理解する必要はないということである。本作品を繰り返し子どもたちに演じることで、作品のメッセージを子どもたちの頭や心に少しずつ残していくのである。本作品には白黒だけの場面がある。子どもにとっては、これはいつもとは「何か」が違うとを感じるであろう。いつも見ている絵本や紙芝居は、色鮮やかなものばかりである。嬉しく、楽しく、何度でも読みたいものである。しかし、本作品の白黒の場面はそうではない。なぜか気持ちが悪い、もう見たくない、でも気になる、というような、いつもとは違う「何か」を子どもは感じるのである。これが、大人の理解の仕方とは異なる、子どもなりの理解の仕方である。

あるいは、「簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりし」とあるが、「ノーモア ヒロシマ」はそれに最適であろう。もちろん、子どもは「ノーモア」の正確な意味はわからないかもしれない。しかし、作品の中でこの言葉を聞いた際、この言葉はとても「重い」ものだと感じるであろう。繰り返し遊びの中で使うことで、周囲の大人が「戦争とは何だったか」、「平和とは何か」を語り始めることもある。こうした子どもの周りの環境の反応によって、子どもはこの言葉の「重み」を感じていくのである。

年長になっても、本作品を完全に理解することは難しいかもしれない。しかし、いきなりすべて理解する必要はないのである。子どもの育ちは、幼稚園や保育所で終わるのではなく、小学校以降も続いていくのである。小学校の学習の中で、本作品を再度読むことで全体の意味がわかることもある。幼児期には、そのための土台やきっかけを作っておけばよいと考えることで、本作品を活

かすことができるであろう。

ここで忘れてはならないことは、演じ手の力量である。「語り方がとても上手で、鳥肌が止まらず、途中涙が出そうだった」という意見があったように、本作品の演じ手の力量が重要である。本作品の白黒だけの場面や写真が訴えかけるものも多いが、こうした仕掛けを活かし、本作品のメッセージを伝えるのは演じ手である。つまり、本作品が子どもに届くかどうかは、演じ手の力量次第ということなのである。

(3) 平和紙芝居の果たす役割とは

最後に、この代表作『二度と』を創作した松井エイコの母は絵本・紙芝居作家のまついのりこである。そして松井エイコの祖父は経済学者で戦時下、特高警察に逮捕されている。まついのりこは当時のことを「1944年3月9日、まだ底冷えのする寒い日、父は、治安維持法の名のもとに捕えられた。39歳だった。2年3ヶ月の実刑判決を受けた父は、敗戦の年の10月、マッカーサー釈放令で釈放されるまで1年7ヶ月、牢獄に閉じ込められた。」(「あの日の空の青を」から)³⁾ 無実の罪を着せられ獄中での生活がもともとで49歳の若さで亡くなった。と回想している。その思いが娘まついのりこに受け継がれ、さらに孫娘の松井エイコに受け継がれることでこの大作が完成したといえるのではないかと考える。平和を考えると、無くてはならない紙芝居が松井エイコによって誕生した。

【注】

1) 新潟青陵大学短期大学部 幼児教育学科1年、127名対象の紙芝居特別講座(2018年2月14日)と千葉県野田市教育委員会主催による保育士55名対象の紙芝居研修会(2018年5月29日)にて平和紙芝居『二度と』を実演した。事前に質問紙を配布し回答は自由意思によるものであること、結果を集計して報告書にまとめることについて説明したうえで無記名式の自由記述のアンケート調査を実

施した。

【引用文献】

- 1) 紙芝居文化の会が「世界 KAMISHIBAI の日」について HP に掲載すると同時にポスター、チラシ等を会員に送付した。会員数 922 (国内：個人 570、団体 12 海外：個人 326、団体 14)
- 2) 厚生労働省 (2018)、「保育所保育指針解説」
- 3) まついのりこ 2005『あの日の青い空を』 pp.9 (童心社)

【参考文献】

- 紙芝居文化の会 2017『紙芝居百科』(童心社)
- まつのりこ 1998『紙芝居・共感のよろこび』(童心社)
- 鬢櫛久美子・野崎真琴 2009「戦時下における紙芝居の議論 ―雑誌「紙芝居」を中心に―」名古屋柳城短期大学『研究紀要』31号 pp.43-55

正司顯好 (埼玉東萌短期大学教授)

浅井拓久也 (秋草学園短期大学准教授)

